

三河アララギ

平成二十五年

六月号

第六十卷 第六号



ニューヨーク日記(80) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 26, 2012 : Care package from Geneva!

Blue Shoe Diaries



十代のころからの友達って良いよね～安心出来る、信用出来る友達だよ～暫く会わなくても話しだすと一瞬の内にお話弾むよね～そんな大親友が最近ジュネーブに寄った時、私の大好物のお菓子を箱いっぱい送ってくれたの!開けたら頭の中が十代に戻って大はしゃぎ。これを一緒にNYで喜べるのはジュネーブ時代のお友達しかいないと思い、早速連絡して早く来ないと食べちゃうよ～って。このパプリカのポテチたまらん!

Friends you make in your teens know you well. Really well. And they know you for you, not so much for what you do and who you know. Even if some time passes, once you talk or see each other, you can pick up right where you left off. One of dearest friends was passing by Geneva recently and sent me this care package with many of my favorites! Once I opened the box, it was like time tripping to my teens. The only course of action was to share this with another friend from Geneva days who lives in NY. Message: 'Got paprika chips, hurry before I eat it all'.

目次

第六十卷第六号(通卷七一四号)

表紙	マロニエ	今泉	由利	(1)					
ニューヨーク日記(80)		Blue Shoe		(2)					
感銘歌 御津磯夫第十歌集		大須賀寿恵		(5)					
歌集「スモン」		岡本八千代		(6)					
風の音		今泉	由利	(7)					
チゴユリ		弓谷	久子	(8)					
ひなげしの花		内藤	志げ	(9)					
一片の		林	伊佐子	(10)					
椎茸乾燥		伊藤	忠男	(11)					
心の涙		安藤	和代	(12)					
紫菜花		足立	晴代	(13)					
春の雪		鈴木	孝雄	(14)					
神木		胃甲	節子	(15)					
蓬摘み		清澤	範子	(16)					
温もり		半田	うめ子	(17)					
矢車草		近藤	映子	(18)					
わが夫の		伊与田	広子	(19)					
理想		杉浦	恵美子	(20)					
名残		平松	裕子	(21)					
誕生仏		小野	可南子	(22)					
少年のもの		山口	千恵子	(23)					
牡丹花		夏目	勝弘	(24)					
ふと目覚めて		佐藤	喜仙	(25)					
落花一片		秋山	逸穂	(26)					
ゆれうごく		白井	信昭	(26)					
春一番									

笄									
蒔きました									
『ことよせ』									
『俳句』									
私の一首									
ある自然科学者の手記(13)									
絹の話(31)									
物理学者と詩歌の世界(41)									
短歌に詠まれた茂吉									
楽しい時間(7)									
子規の短歌革新とアララギの歌人(11)									
『歴代天皇御製歌』(十二)									
贈呈誌									
「鍼の如く」 其の二									
「水魚」のことから(149)									
ことのはスケッチ(414)									
編集室だより(二〇一三年四月)									
和菓子街道(80)									
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定									

阿部	淑子	(27)							
富岡	和子	(27)							
いーはとぶ		(28)							
植村	公女	(30)							
	一石	(30)							
	喜仙	(31)							
	皓一	(31)							
	久子	(32)							
	和代	(32)							
	節子	(33)							
	伊与田	広子	(33)						
	大橋	望彦	(34)						
	今泉	雅勝	(36)						
		一石	(38)						
	鮫島	満	(40)						
	山本	紀久雄	(42)						
	佐藤	喜仙	(44)						
			(45)						
			(46)						
	夏目	勝弘	(47)						
	岡本	八千代	(48)						
	今泉	由利	(49)						
	平松	温子	(51)						
			(52)						

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

春雨のあやにふり過ぎて新しきわが歌碑は建つ天一天上

P
36

第九の我歌碑除幕より帰り来てこころよきかな老虚脱感

P
36

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

印刷の紙に切れたる中指を嘗めつつ要項一〇〇〇部刷り上ぐ

十五年勤め続けて来し吾よ今日は会議のお茶も汲みゐる

数珠玉はなめらかにしてこそばゆし数珠玉入れて子の手玉縫ふ

風の音

蒲郡 岡本八千代

いつまでも風の音するこの夜更などかは知らねど空のこころ

遠のきし風の音また鳴りてきぬわれの独りの夜の書屋に

風よ風吹けば鳴る音当り前を静かに聴きをり夜半の春風

おおじいとおおばあ言ひしそのあとに「ちゃん」をつけてねと頼みし私

年々老いて年々賢しなどといふ諺おもふ今宵の惜春

一日一日蒼の牡丹の花びらのうすくれなるはあえかなりつつ

独りきりになりたまひたるお姉さんに見せたし今宵の牡丹の花を

年々に同じき処に咲きてゆるる君のコメ花われの雪柳

わが漬けし古き梅干まだ赤し遠くに住まふ孫らに送らん

しろじろとゆれてをりけり隣家の杏の花の今年の花が

チゴユリ

東京 今泉 由利

親しみはおほきく増しぬ太陽系水星みゆる金星みゆる

太陽の光は地球に反射して月にとどくと今日の満月

地下茎は続きてゐると地上莖うつむき加減のチゴユリの花

可憐さの形容詞をみな集めひともとひともとチゴユリの花

コナラかなクヌギかしらエゴノキか散り敷く枯葉の山路はひとり

チゴユリもウバユリも咲く里山の今日は芽吹きの萌黄の色に

山路こし息ととのふるひとところチゴユリの花チゴユリの花

新しきことは記憶となりゆかぬひとりのひとと遠き山脈やまなみ

白雲の中より地上に降りきたりふはふは霧の町をふはふは

広大な香港空港ウオーキング羽田行を待ち待つ時を

ひなげしの花

豊川 弓 谷 久 子

しだれ桜の桜公園素通りす静かな花見を今年はせむか
めぐり行く先ざきすべて花盛り花に酔ひをり我が足どりも

我の身にあと幾度の花ならむ知らざればこそ未知なればこそ

丈伸びし孫と縮みし我とが並ぶ桜バックに今日の一枚

三河アララギ六十周年の歌会なり御津先生の面影偲ぶ

御津先生の訓えを受けし我が三十年不肖の弟子でありたることよ

初夏と寒行きつ戻りつ目まぐるし収ひし冬着又出して着る

空家となりし隣家の庭の草の中赤くゆれをりひなげしの花

来春は大学入試かお洒落には余り縁無きみさとが来る

幼なき頃の面影捜す口数の少なきみさとの笑顔の中に

一片の

豊川 内藤 志げ

電線に親子らしきの燕つばき嵐あめの中に翔び立ちてゆく

千切れ葉が燕がきりきり上りのぼり下り春一番を部屋より眺む

道に沿ひ右に左につくつくし長きがうれし大きく一握り

草塚の廻りに繁るはこべらに鎌さし入れて重たき一株

八十の歳の差のある創佑を膝にかきよせ座敷のテーブル

蓬餅餡もも入れず丸め餅黄粉に取りて鶯餅に

自転車の一台無ければ加藤さん呼ばはず帰る急ぐ用なく

袖丈の船底ちよつと詰めただけ着やすくなりぬ綿入れ半纏

木に止る小さき袋を破り見る湧き出づ出づる蜘蛛くも蜘蛛が

何一つ動くものなき窓の外遠くの木蓮ひとひら一片の落つ

椎茸乾燥

岡崎 林 伊 佐 子

若きより椎茸乾燥を為す仕事わが責務にて半生を經ぬ

徹夜して椎茸乾燥のストーブを守る暗夜の小屋は寂しき

午前二時オリオン星座の瞬きを見上る里の空氣冷たき

幾度も離れる小屋に往ききして夜明けの前は睡魔がおそう

呼吸吸気しながら眼氣さましたり朝日すがしく山より昇る

蒲公英の綿毛が風に飛散する着地めざして彷徨ひてをり

草木を焼きたる灰のみ畝に埋め早取り茄子と胡瓜うめたり

遅霜に何処の畑の馬鈴薯も新芽くろずむ四月の半ば

焼け木の炭にて記せる里芋の畝に立てたる板切れの文字

ふる里に帰省するたびわが夫は山路の補修にひと日はたらく

心の涙

大阪 伊藤忠男

青空に雲雀鳴く声懐かしき今は鳥のゴミ狙う声

神仏に託すは我が意無きなれど心の迷い何に頼るか

奥様の「一人で立ちや」と声が飛ぶ心の涙隠し切れずに

突然の春に戸惑う蕾花おぼつかなきや花びらの色

病まだ癒えぬ心に戻り冬暑さ寒さに揺れ動く春

朝は冬昼は夏なり2で割れば春の気温も春にあらずや

冷え込みにコート欠かせぬこの日とて春の印か黄砂が覆う

初々し震えるその手グラス添え押し戴くか先輩の酌

あてもなく風に任せてただ浮かぶ浮雲見つめ羨ましきや

悔れぬ日々の暮しの積み重ね同じリズムで身体支えむ

紫菜花

豊川 安藤和代

逝く先も春が来たかと嫁を恋ふ紫菜花の満開の庭

石巻山のどかに霞佇めば父の声する母の声する

目も耳も手足も老化と言ふなかれ吾はけふから点字にチャレンジ

一字打ち二文字打ちでは確かむるけふはア行で終了とする

白き腹。ピタリと窓につけしまま雨蛙ひと日動くことなし

幼子の片言の様な鳴き声も三日目鶯の美しき声

宿舎へと下宿へと孫帰りたり夫と飲む茶のまことに苦し

「はなはな花花」とふレストランあり「たねや」とふ菓子屋のありて吾が町も春

孫のメール驚かないよバアチャンとて知っていますよエイプリルフル

新しきランドセル背に渡る児の交通小母さん春風の中

春の雪

東京 足立 晴代

雪積り窓より見やる坂道にくの字の如く車連なる

春は来ぬ未だ雪降る野山あり花咲き香り散る里もあり

茶の道の利休忌迎え今も又床の菜花にそよ風の吹く

菜の花咲きて利休忌の碧き空お献茶たてる床の花入れ

春浅し冷き風に花々は如何に過すか不安に見やる

国と国と人と人と同じきに何を考え何をするやら

ミサイルを発射するといふニュース国を守らむ意識のいづる

吾が友ら何かありてもおどろかぬ肝のすわりし人ばかりなり

熱心に重ねし稽古誰が見ても努力現はる舞の手振りに

新しき歌舞伎座成りて喜ばし今亡き名優在せば如何に

神木

沼津 鈴木孝雄

愛大の桜吹雪を抜けて行く同文書院の建物残れり

道草をしつつ歩いた通学路からたちの花何処へ行ったか

下部来て冷たい風呂に身を浸けるお湯の垂れ入る音のみ響く

廃業の富士川ふるさと工芸館和紙館の前にみつまたの花

いかり草優美な花卉を下に向け風に揺られて根を錨する

るりたては岩に止まりてゆっくりと翅を動かし春呼び寄せる

熊野なる速玉神社のご神木なぎをもらいて帰路の風祈る

三歳の孫の誕生日忘れかけ慌てて走る郵便局

もつ鍋じやもつたいたいと生で食べ賞をあげたい我が春キャベツ

さやえんどう採り尽くしたと思いきやまた回りゆきまたまた採れた

蓬摘み

豊橋 胃 甲 節 子

今年の桜見られましたと眩きて祥月命日の母への合掌

よろよると眩暈の後に残る頭痛うからの電話の声に安らぐ

吾がもろき齒にても初物竹の子御飯珍しく美味しく頂きました

春霞黄砂花粉か知らねども弓張山系影さへ見へず

晴れ渡る暖かき日は蜂達も木々の間を飛び交ひてをり

どうしても歩きに行くとふ気力湧かず四月は早くも十五日過ぐ

何処に棲むか知らねど庭に幾度も鼯は来てはすぐ逃げてゆく

師の描く藪椿の絵其のままに亡き友よりの藪椿咲き次ぐ

蓬摘み花見と遊んでみましたとお隣の奥様の品良き草餅

ベランダに残る桜の花びらが吾の頭上にひらひら舞ひ落つ

温もり

春日井 清澤 範子

春の陽差しに堤防の桜ふつくらと小枝の先に紅きボンボリ

土に降した黄色の菊も水仙も春の陽気に清らかに咲く

庭の椿は赤白混じりて八重の花大輪にして皆下を向く

気温二十度紅白混じりの庭椿咲き始めたりパツと明るく

低気圧通り過ぎたる朝温かく庭の椿は一斉に膨らむ

八王子神社へ心納め来ぬ家の葉ぼたん臺立ちてゐる

心癒やす桜満開の公園の憩ふベンチに温もりのあり

竹の子を買ひぬ糠を入れ茹で上げて家族三人の夕餉の膳へ

新物の竹の子を煮るなりホツホツとストーブの上にてガスの節約

手押し車まだ早きにと自転車を押しして桜を楽しみ歩く

矢車草

新城 半田うめ子

美しく矢車草の咲き居りぬわわが友の庭猫も好きとふ

幸福でありし友は矢車草大切にして笑顔にて語る

杉山にて店のありたり思ひ出す六けん長屋種々の品あり

リハビリを終へて帰りし孫香奈の桜見物へ作手より田峰へと

吾のまくくず米へ舞ひくるさわやかに風の吹く中数多の雀

東の杉林の中今日も又犬の死がいにてからすのさわぐ

音次郎様米を下されき水車小屋杉山にての守り来たりし

村六分なりて自殺せし田の中へ埋められし悲しき人あり

六分さと言ひ伝へ来し田のありて塩をまきて作業するなり

わが夫の

名古屋 近藤 映子

早や卯月晴れ日の風のまだ冷て桜花咲く道通抜ける風

見降しの桜の花は白く咲く緑陰歩道を歩き行く人

後十ヶ月有るや無しやの我夫の余命を如何に過ごすか

夜明前ふと夫の声に目覚めたり限られし命に声も出せぬのに

我夫の教え子の昇進挨拶状の届く夫に読み聞かす目の動く

限られし夫の命と気になりて見舞いし夫の顔は穏やか

此の年は四月中葉の朝の冷え再度ふとんに温りぬ

わが夫の余命限りを告げられし吾まだ何故か納得出来ず

わが夫の左手取りて握手する少し力の無きは気になる

わが夫の限られし生を如何にとわれ思うばかり

理想

豊橋 伊与田広子

年老いて先ず健康にはげむなり毎日超短波かけをりぬ

毎日に肝腎腸かんじんちようを温むる一日三回理想とさるる

病みもせず風邪も引かずに四十年今後も健康百才までは

年老いて次第に友は逝きたりて淋しくなりぬ近頃の日々

近頃は鳥の鳴き声聞えなき幼き頃を思いなつかしむ

幼きは辺り田園螢ほたる飛び家に入り来る螢もありし

去年は鶯の声聞きしに今年は全く聞かずとなりぬ

年々に自然なくなり我が住家すみか殺風景になりて行くなり

ムートンの蒲団に寝れば心地良きわれ知らぬ間に眠りてしまひぬ

風強き快晴なるに気持良き久しぶりにて外歩きせむ

名 残

蒲 郡 杉 浦 恵 美 子

もういいねもう捨てるよねスニーカー貴方が帰って履くことはない
もういいね夫の靴を処分せむ我が身に幾度も言ひ聞かせつつ
早朝のジョギング欠かさぬ夫なりき靴底何れも磨り減りて居る
捨てやうと思へど夫のスニーカー名残がひとつ消ゆる気もする
持ち物は使ひてこそものなりき主居ぬ今残る虚しさ
捨てるのはいと容易いノートだが頁を繰れば書き込み懐し
行事なき暮しになりても四月とは何か新たに始めたき気する
付き添いは誰も居ません嗚呼夫よ貴方が居ぬのは斯ういふことか
白内障は大した手術じゃないけれど夫が居ぬのがこんなに応える
我が夫を深く慕へる教へ子に形見の時計託さむと思ふ

誕生仏

豊川 平松 裕子

木の間よりもれくる真昼の光り受け舞ひくる花に向きてたちをり
かそかなる風に花びらは散り続け気多の谷川の流れにのり行く

誕生仏の厨子に蓮華は飾られず無住寺正覚寺の今日花祭

本堂の真中にゐます誕生仏我ひとり来て甘茶そそぎぬ

正覚寺に智慧尼ゐませば誕生仏の小さき厨子を花で飾らむ

畑にゐし我にたんぽぽを摘みて来よと花祭の花を摘ませし智慧尼

三角の小さきお揚げを買ふ人ら五角形には気づきてくれぬ

五角形に出来たるお揚げを三方に盛りてうやうや神に供ふる

長いすに頭を垂れて祝詞聞く爪先薄き靴下気にしつつ

五角形の油揚げ作り五角形の稲荷ずし出来たり我の合格稲荷

少年のもの

豊川 小野可南子

蹴る水のしぶきは高し四級になれたと素直に喜ぶ佑真

泳ぎ終へてギャラリー吾を見上ぐる目キラキラかがやく少年のもの

バックして道譲りくるる白セダンゆき会ひて知る私の息子

白と黄の花の咲き並む佐奈川の流れ豊かに清すがの水

ハリハリと音たて刻む春キャベツ山盛りサラダの明るきゆふべ

エプロンのポケット溢れむばかりなり朝摘みえんどうのみどりまみどり

つばくらのめ我が肩かすめて高みへと線残すがに速く飛翔す

窓よりは春の日射しの海ひろし穏やかに和やかに会ははじまる

長椅子に坐りて会話も無き二人そんな二人をガラスは映す

たはやすく水晶体をはずす医師模型といへども息のむ私

牡丹花

豊川 山口千恵子

一日にて蓄ほころぶ紅の色早や花咲かむわが牡丹花は

ひまあらば牡丹見に来と文せし子規庭に見て立つわが牡丹花を

冬を越し白く芽出づる種生姜埋めゆくなり短き畝に

週一度通ひて一年経ちにけり高齢健康体操教室

一勢に八段錦を行なひぬ蛍光灯のうなりの下に

古びたる消防法被を受け継ぎて回り番なる今年は組長

わが組の六軒の家に配りゆく四月一日号の市の広報

地に落ちし花びら淡き紅の色踏まれてやがて土になりゆく

ふつつつとマーマレードは鍋の中その香の中に一人の朝

新世界より第四楽章流れつつ鍋に煮えゆく黄のマーマレード

ふと目覚めて

豊川 夏 目勝 弘

部屋の闇に目覚めて浮かぶはひたすらに食を求めし小学生の日日

父親の作りくれにし自転車にて新聞配りしは小三のころ

学校の運動場は芋畑畝間を通り教室に向ひき

教科書による勉強の少なかりき炭焼お茶もみ農作業などなど

食べる術小学生で学びたりき年金生活楽しみてをり

山に川に食へる物求め朝より暗くなるまでひたすらなりき

山間の田は原野にもどりてしまふ蛙の鳴かずカラスが騒ぐ

芭蕉の句に思ひだすあり真夜中にひたすら蚤を捕へつぶしし

動くこと今は少なくなりけり今日はスーパーまでの一万歩のみ

山や川をめぐることなし一万歩を歩めば今は食べる物がある

落花一片

東京 佐藤喜仙

犬のため細く開けたる戸を通り風に舞ひきし落花一片

新入生迎ふる工科大学の乙女椿は笑みて門前

春山に向ひ叫べばその訝何やら優しく吾には聞こゆ

東京には残雪をちこち見らるるが北国今日も雪しまきける

風船の空行くを見て遠方に働く我が子と遊びしあの日

恋猫の未明の鳴き声聞くたびに思ふは日本子孫増やせよ

春めきて道草をする子供等の影は紫雲英の花の中なり

逃げ水は親の齡との差のごとく追つても追つても先にあるもの

凍蝶は重たき業を背負ふては冬に遍路を巡る人なり

直実が出家にあたり脱ぎ捨てし鎧掛けたる松に緑立つ

ゆれうづく

「招待」 秋山逸穂

ゆれうごく懺悔と後悔いだきつつ信心せずにとだただ生きる
枯れ枝の雪よりしきりに落ちている凍らぬ雫光を放つ
森をいで野風の中をゆくわれに草の香りはたちのぼりくる
病床の窓より眺むる青空は高さで広さに限界を持つ
常日ごろ通り過ぎこし坂道は病院の窓の真下を通る

春一番

豊川 白井信昭

み社の楠の枝葉をゆらす風木梢撓めてこの春一番
打ち寄せる波打ち際に貝殻のうず高くなり梅田の浜は
菜の花のこれから咲くという蕾うましようましと朝に食むる
共に詠み共に学びし会友と御津山山中吞龍歌会

筍

横浜 阿部 淑子

私もう十五首できたと敬友の語るる面に春の風吹く
入園式行く道々をあぶないよ走る孫追う祖母の危うし
山奥に入り掘り来し筍を茹がき送り来わが妹よ
二年ぶり東北地方の花見会住めざる家に花びらのまう
半身の動かぬ友はリハビリにて輪投げ反復立つ日を信じ

蒔きました

東京 富岡 和子

自生するあさがお双葉みえません桜吹雪の花びらの下
柿若葉日毎色増す通学路ランドセル鳴る駆け足聞こゆ
蒔きましたレンゲ菜の花咲きました畑と称す一尺四方
亡母愛でし立浪草の草叢に静かな花は宝鐔草
予報あり黒雲寒気突風と座り見てゐるこの夜満月

『ハルカ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

わが土手に群生したる水仙のま白の中に黄色二つ三つ

牧原規恵

ピカピカになるまでシンクを磨きをり諍ひのあとの虚しさまじつ

三田美奈子

わが母の検査結果を待ちてをり窓にそぼふるこの優し雨

稲吉友江

春の日に卒業生らの顔光る白線流しをしてゐるテレビ

靄深く西浦半島は茫々の君とわれとのカフェのこの窓

鈴木美耶子

上りこし岬の山の安札の埼見下ろす春の海はぎらぎら

如月の余寒の今朝に雛飾る嫁とみたてしニューフェイス雛

吉見幸子

四十年勤めあげたる夫を祝ふ家族五人の「皆生^{かいぎ}」の晚餐

傾きてあるがままなる家に住むハザードマップの新たに届く

牧原正枝

ローマ法王つひに決まりて煙上る白々としてま直に上がれり

とりたての玉葱ひとつみじん切り我が指先に匂ひ残れり

岩瀬信子

なんとなく古き趣の沈丁花香り深きにしばし佇ずむ

イカナゴの宅急便のとどきたり春の便りの姉のやさしさ

石田文子

春風の強く吹きくる畑中に夫と我とは小石を拾ふ

山崎俊子

いつしかに見づらくなりしこのわが目手術して今朝はさまざまたしかむ

境内の陽だまり中に聴きてをり住職語れるわが父母の青春

水野絹子

コメといふ君が母上の名の花よつぶつぶま白わが雪柳

岡本八千代

北の窓開けたればあは淡淡杏の花ああ千晶えいけつとのかの永訣ときの季

『俳句』

花水木恥らひすこし残りたり

植村公女

黒板に今日の一句や新入生

書道展出て春夕焼に体面し

春の土一万歩ほど踏みにけり

一石

葉桜や毛虫の宿る時空間

口に食むやがて散りゆく桜なら

春の蝶をなご童のうなゐ髪

喜仙

弁当は売り切れ急に花満ちて

うつり香や山独活採りの掌

小手毬や深川めしの昼の宴

皓一

古き句碑立つ辺りより春の暮

チューリップ四方八方に朽ちにけり

私の一首

血圧よしと主治医の言葉草原に水仙の花摘みて帰らむ

弓谷久子

月一回の内科医の診察日、「血圧は上等ですよ」と主治医に云はれる。只それだけで何と無く身も心も軽くなつて帰り道人影も無い沿線の草むらの中に咲き匂ふ水仙の花を摘む。

珍らしく風も無くよく晴れた日、春浅き草原の枯草の中に咲く野水仙の群生、御津山を真近く見て御堂山をはるかに眺め生きているつていいなと実感。少々大袈裟な表現になりましたが歌は素直にその時のありのままを歌つたつもりです。

わづか五本のブロッコリーを鴨は柔らかき芽のみ荒らしてゆけり 安藤和代

ささやかな菜園に友達から届いた五本のブロッコリーを植えた。水やり肥やりとやとすくすく育つたある朝、その哀れな姿に愕然とした美味しそうな若緑を食べ散らしてある。散乱の状態に鴨だと直感した。大切に育てたのに…。あまりの無造作な食べ方に怒りを越して笑えて来た。鴨も生きる為には必死なのだ。たっぷりビタミンを補給して親子で騒いでいる鴨を思いながら自然と私の心は鴨を許していた。今朝も遠く鴨の声が聞える。

思い切り水仙切りて下されば溢るる匂ひに頬を埋めて

胃 甲 節 子

お隣の庭のなだりに、奥様がとても上手に配置良く水仙を植えられて、毎年楽しみに、散歩の度に立止まり眺めて、其の優しく床しい香りに、飽きる事なく眺めるのですが、今年は一度も散歩する気力も無くて、他のお花を戴いた時、其の事をお話しさせて頂きました。其の後抱える位沢山の水仙を切って、お持ち下さいました。嬉しくて戴いた水仙に思わず頬を埋めて、其の香りと嬉しさを、一首と致しました。

ネーブルの熟るる^{あたり}辺にひよの来て楽しそうなさえずり聞こゆる

伊 与 田 広 子

近頃は辺りは、都市化され小鳥の声など聞くことが出来ない。鶉の楽しそうな声に、私も楽しくなりて聞いていた。空は晴れ渡り私は居間において今までに聞いたこともない楽しそうな鳴声であった。その為この歌を作ったのであったが、後で分ったが、鶉に代償を払はされていた。ネーブルの六個位がつゝかれていた。鶉らは甘い汁を吸って楽しく遊んでいた事である。私も鳥達の楽しげな鳴き声を聞きこれで良きと思っている。

ある自然科学者の手記 (13) 大橋望彦

平成25年4月29日記

『デ・プライド』①

近頃、盛に会津藩の武士道が取り沙汰されている。これは一つに大河ドラマの『八重の桜』が放映されていることもその要因となつていえると言えよう。然し、筆者にとつては、単にドラマの関係ではなく、身近な問題でもあり、この点での関心は人一倍高いと言つてよいであろう。と言うのは、実祖母が会津藩士の娘であり、当時の『戊辰の役』での敗者として辛酸を舐めた一人であつたからである。このことは、長寿（享年百歳）であつた祖母には大変可愛がられたので、具に当時の戦いの状態について話を聞き、また、書き残された『光子』と言う自叙伝にも十分その有様が記されているからである。

万延元年生まれの光子（祖母の名前、みつとも称していた）が九歳の頃に戊辰の役は始まつた。父の鈴木丹下守重光は、当時、会津藩士、軍事奉行として最前線に立

ち、初期の戦いで敢え無く銃弾に斃れ、戦死している。武家に生まれた光子は、日々の生活でも専ら武士の娘として育てられ、特に、その操の立て方については厳しい躰を受けたようであつた。会津より南部藩のある下北半島（現青森県の津軽）までに落延びる旅すがら、食事時には、食膳の箸箱を短刀と見做して胸にあてがい、俯せに倒れて自刃する練習をさせられた話を身振りで教えてくれたのもよく憶えている。それらの話の端々に、武家の嗜みとか、身構えとか云う言葉がよく出てくるが、これは今様に云うマナーと云うのであるが、大変喧しいものであつた。諺の中に、『武士は食（くわ）ねど高楊枝』とか、『貧すれど鈍せず』とかあるが、要は心掛けとして、侍のプライドを持ち続けろと言ふことであろう。

このプライドが大変難しい。日本語で誇り、とか自尊心と訳しているが、心の持ち方を示している。然し、実際に表現する時にはその姿である場合が多い。どんなにお金がなくても楊枝を啜（くわ）えて、腹一杯の顔をするなんて、瘦せ我慢もいいところで、格好をつけるな一と、言いたいところである。それこそプライドを傷付けているの

ではないかな。ただし『貧すれど鈍さず』の方が嗜みとしては判るような気がする。清貧に甘んじて、指などを唾えるでない。と言う気持ちは気高い。気位が高いと言うのと、プライドが高いとは同じ意味に用いられているが、両者とも時々、本来の意味とは異なった使い方がなされているようで、『あの人は気位が高い……』と言うのは、多少その人を避けている場合が多い。本当の意味の気位の高い方と言う尊敬の意味ではなさそうな言い方となる。やはり、『あの方はプライドの高い方だから……』は、決してほめ言葉として云うのではなく、敬遠気味な言葉で用いられている。それは、プライドと言うのは仲々計り知れない何かがあるからで、人により捕まえ方がそれぞれ異なることから由来する結果なのである。そして、このプライドがあることが逆に邪魔になつてしまうことも出て来る。プライドを捨てて、裸一貫となつて事に当たることは勇ましくもあり、天晴れなことである。

これは仲々出来ないことだからそう思うので、誰もが直ぐにプライドを捨てる事が出来るならば、こうは、

言わないであろう。この仲々捨てきれないプライドに傷つけるようなことは多々あるにしろ、プライドとはそんなに磨かれているのであろうか？ 中にはこのプライドを鼻にかける御仁が居るが、どうも鼻持ちならない。そもそもこのプライドは、個人的なものであり、その人々が持つ自覚のようなものであるが、社会に階級制度が出来て、上層と下層に区別され、その上層のものが下層のものを見下した際に感ずる優越感のようなものから生れて来るとしたならば、不要なものと言えるであろう。プライドを其処まで悪く言うつもりはないが、かなぐり捨てたならばどうなるであろうか。高名な一遍上人が説いた『全てを捨てて、生まれたときと同じ裸一貫となれば仏となれる』と言う意味は、プライドを捨てる気持ちに一脈通じるところがあるのであろうか。上人は徹底している。『妻子を捨てた上で、捨てることをも捨てる』とまで云う。

ここまで来ると、信仰と言わざるを得ないので、其処までは付いて行けなくともプライドを外すことは出来そうである。

絹の話 (31)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

アナフエ蚕（野蚕）の繭

アナフエ蚕はマダガスカルやケニア等赤道直下の森に棲息するギョウレツケムシ科の絹糸昆虫で2000〜10000頭位集まり、集団でコツパン位の大きさからアメリカンフットボール位になる巨大な繭を作る小さな虫達です。マダガスカル繭の形はアメリカンフットボールに似ていますが、ケニアのそれは鳥打ち帽子のようで、大きさに比べて薄くなっています。いずれも繭は薄茶色で、繭層は大きく4層に分かれています。

1層目の外側は薄い和紙の様でその下は柔らかいスポンジ層が5ミリ〜10ミリ（薄い所、厚い所）有ります。2層目は渋茶紙の様に固い層で全体を包んでいます。3層目は1層目と同じスポンジ綿で、4層目が薄グレーの小型のピーナツ状の極薄い繭で、整然と並んでいる訳では有りませんが、高層マンシヨンの様です。

蛹は2cm前後で、成虫は白黒の縦ストライプの粹な模様で、超音速ジェット機形の三角形です。

日本の春先に桃の枝の又にも毛虫が集団で白い巣を作るのと似ています。（その巣も立派な絹です、興味が有ったら集めて切り傷等の抗菌剤として使ってみて下さい、腫れたり膿んだりしない事請け合いです）

△堅牢な防御装置▽

この繭から糸を作ったらどんな糸になるか興味津々で何人かの仲間に頼んで糸作りに挑戦しました。

ところが2層目の渋茶紙の様な所が、今迄野蚕を精練した方法ではびくともしません、大部分の野蚕繭の解除は家蚕の様に簡単では無いのですが、それにしても凄い抵抗を受け、思慮苦闘の末、ほぐして糸にする事に成功しましたが、事業化は不可能と云う結論になりました。繭と格闘した人達が「かゆみ」を訴えましたので、和紙の様な表層を顕微鏡で見ると、小さなとげが無数に付いていました。これが皮膚に刺さってかゆみを起こしていたのです。

この繭をマダガスカルから持参した日本野蚕学会先生によると、蛹を食べるとにわかには脚気になると云うことです。猿など樹上動物がこの繭の蛹を食べようと固い層

を破るための格闘をしているうちに体中かゆくなり、やつと手に入れた蛹を食べて脚気になるので、一度経験した動物は二度と手を出さないそうです。

熱帯の森では生き残る為に熱や湿度、紫外線からの防御ばかりでなく、他の動物に捕食されない為にこれほど幾重もの防御装置を備えねばならないとは驚くばかりです。天災などから身を守るシエルターの開発に何かヒントはないだろうか？昆虫の機能をもっと研究すれば、それに習う事が沢山有りそうです。

例えば寝袋の開発、防弾チョッキ等直ぐにでも応用が出来そうです。

△機能研究に着手▽

苦心して糸を作り、織物を試作しましたが、残念ながら艶もなく、ボンボンしていて絹としての付加価値は期待出来そうに有りません。しからば他に利用方法は無いものだろうか、この昆虫が数千万年かけて進化しながら生き延びて来た英知の何処か、何か、哺乳類である人間にも利用させてもらう、真似させてもらえる事が潜んでいないだろうか、この繭の特異な機能性に着目して各方

面から研究が開始され始めました。

この繭には全ての蛹が羽化する為の共同の脱出孔を繭を作る時共同作業で作ります、その孔に何百頭もの蛹が交通渋滞を起こさず整然と出て来る訳はどの様なホルモン、遺伝子が関わっているのだろうか？これを解明して交通工学、付和雷同抑制などにヒントはないだろうか。

かゆみや脚気をもたらず成分の解析をして新たな新薬開発の糸口はないだろうか？等々絹とは全く違った方向の研究も進んでいます。

人類に役立つ新たな発見があれば、発展途上国も新たな経済発展の一つを手にする事が出来るかも知れません。

人類が農耕を始める前迄は、昆虫を多食して、それに助けられて今日が有るのに、1万年此の方すつかり昆虫食を忘れ、森を切り開いて農業全盛時代を謳歌している人類に反省する所は無いだろうか？

昆虫機能開発の研究は未だその緒についたばかりです。地球上にはまだまだ有効利用出来る未利用資源が無尽蔵にあるのではないでしょう。

物理学者と詩歌の世界 (41)

一石

サミュエル・ティン

サミュエル・ティン (Samuel C. C. Ting、中国名・丁肇中、1936-) は中国系アメリカ人の物理学者。専門は高エネルギー素粒子実験。

米国ミシガン州アン・アーバンの生まれ。幼児期に戦中の中国へ帰国した。戦後、国立台湾大学の工学の教授となった父と心理学の教授となった母から家庭において個人教育を受けた。彼が初めて行った学校は12歳の時の台北の建国中学であった。その後、国立成功大学で1年間学んだ。20歳の時に米国へ戻り、ミシガン大学で工学、数学、物理学を学んだ。1953年数学と物理学の学位を取得、1962年には物理学の博士号を得た。1963年、欧州原子核研究機構 (CERN) で高エネルギー素粒子実験を行なった。1965年よりコロンビア大学で教鞭をとりながらドイツ電子シンクロトロン研究所 (DESY) でも研究。1969年、マサチューセッツ工科大学 (MIT) の教授となる (参考資料1)。

サミュエル・ティンはバートン・リヒターと共にジェイ/プサイ中間子の発見により1976年のノーベル物理学賞を受賞した (注1)。

1995年、米国では究極の超大型加速器と言われた

超伝導スーパーコライダー (SSC) が中止となり地上での加速器による高エネルギー実験は大きな制約を受けることになった。このような状況下、ティンは宇宙空間での「アルファ磁気分光器 (AMS)」を用いた宇宙線観測実験を提唱したのである。AMSは国際スペースステーション (ISS、注2) に設置された。今年4月4日、ティンが率いるCERNなどの国際チーム (注3) は、高い精度の観測で「暗黒物質と思われる現象を観測」と発表、新聞のトップニュースを飾った。宇宙空間に極めて数が少ないはずの「陽電子」を、理論の想定を上回って観測したのである。正体不明の暗黒物質 (注4) による現象を本当に観測したとなれば、これは世紀の大発見になる。現在、慎重な解析が続いている。

サミュエル・ティンはノーベル物理学賞以外にE・Lawrence賞 (1975)、DeGasperii賞 (1988) を受賞している。米国科学アカデミー会員、中国科学アカデミー会員、台湾科学アカデミー会員でもある。

注1…物質を構成する主要な素粒子の1つであるチャーム・クォークは、当時3個のクォーク (アップ、ダウン、ストレンジ) だけでは説明ができなかった複数の事象を統一的に説明できるものとしてその存在が予測されていた。この予測は、1974年にサミュエル・ティン率いる米国ブルックヘブン国立研究所 (BNL) のチームとバートン・

リヒター率いるスタンフォード線形加速器センター(SLAC)のチームによって、それぞれ独自にチャーム・クォークと反チャーム・クォークからなるジェイ/プサイ(J/ψ)中間子が発見されたことにより確認された。BNLのチームは新しい粒子をJ中間子と命名し、SLACのチームはψ中間子と命名したが、名前を一本化する協議が失敗し、妥協案としてJ/ψ中間子が採用された。

注2

国際宇宙ステーション(ISS)は、米国、ロシア、日本、カナダ及び欧州宇宙機関(ESA)により建設された宇宙ステーションである。地球及び宇宙の観測、宇宙環境を利用したさまざまな研究や実験を行うための巨大な有人施設(総質量344kg、全長73m、全幅108.5m、全高20m)。地上約400km上空を秒速約7.7kmで地球の赤道に対して51.6度の角度で飛行し、地球を約90分で1周する。1999年から軌道上での組立が開始され、2011年7月に完成。運用終了までに要する費用は1540億USDと見積もられており、人類史上でも指折りの高価なプロジェクトである(参考資料2)。

注3

この実験には16カ国から56の研究機関、500名を超える科学者が参加。重量が7トンのAMSは2011年5月19日にISSに設置された。

注4

1930年代、スイスの天文学者F・ツヴィッキは地球から約3.2億光年にあり千個以上の銀河から成る「かみのけ座銀河団」を観測。明るさを元に計算した銀河団の質量値と銀河の運動に基づく(力学計算による)質量値が大きく食い違っていることから、ツヴィッキは「銀河団には目には見えず光もしないが膨大な質量を有すなにかがある」と結論した。その後、1970年代になって米国の天文学者V・ルービンはアンドロメダ銀河の回転を詳細に観測、「銀河の外縁部の星の回転速度は中心部の星々とほぼ同じ速度で動いている」ことを発見。これは外縁部の星はゆっくりと回転するという「常識」を覆すものであった。現在では、ツヴィッキとルービンの発見は「暗黒物質の存在の観測的証明」と考えられている。さらに2006年には80億光年かなたの銀河団に暗黒物質が「見えた」という報告(NASA)もあった。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア、サミュエル・ティン』: Wikipedia, the free encyclopedia. Samuel Chao Chung Ting
- 2) フリー百科事典『ウイキペディア、国際宇宙ステーション』

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

九 佐藤佐太郎 3

右の二首の小題は「大石田にて」である。一首目は茂吉の、「この庭にそびえてたてる太き樹の桂さわだち雷鳴りはじむ」「四百年の老の桂樹うつせみのわがかたはらに立てる楽しさ」（『白き山』）という聴禽書屋での作を踏まえている。「人もなし」の「人」は茂吉である。

二首目の「今宿の薬師堂」は大石田滞在中に茂吉がしばしば訪れたところで、「最上川の上空にしてのこれは未だうつくしき虹の断片」の刻まれた碑が建っている。茂吉は「恋しかるものの如くに今宿のへぐりの岨ゆ蔵王山が見ゆ」（『白き山』）と今宿を詠みこんでいる。

佐太郎夫人の佐藤志満は、〈聴禽書屋の桂の木〉〈今宿の薬師堂〉を佐太郎より十年早く、「もみぢせる桂の高木あかるくて聴禽書屋のうへの夕光」「西日さす今宿の薬師堂の坂もの悲しくてわが下りゆく」（『渚花』昭和三十八年）と詠んでいる。

逝きてより二十年過ぎし先生のいませがごとくわれは悲しむ
『開冬』昭和四十八年
よき人の七十年のみよはひを吾もやうやく老いて尊む
『天眼』昭和五十年

二人とも長生きをする古い人としてひさびさにその声を聞く
同 昭和五十三年

二首目には「童馬山房先生二十三回忌一首」と詞書がある。佐太郎は茂吉が作歌の叶わなくなつた七十という年齢にこだわりを持っており、『星宿』の後記に、

さきに『天眼』をまとめたとき、「私の作歌はいつまで続くかわからないが、これから後のすべては七十歳以後の作といふことになる」と言つたが、常に「七十歳以後」といふことを意識において作歌したのであつた。先師斎藤先生には七十歳以後の作はない。私は未到の境地をのぞきみる気持で作歌しようとしたのであつた。

と述べた。

三首目には「河野与一先生夫妻。上句茂吉先生にまね

ぶ」と詞書があるが、この「上句」云々は、『白き山』の「あはれなる小説ありて二人とも長生をする運命のこす」を踏まえていると思われる。

わが死後も用なきごとく残らん茂吉の遺品アンモナイト化石

『星宿』昭和五十六年

道に沿ふ代田八幡の鳥居見ゆ晩年の人ここに憩ひき

同

茂吉が山形大石田から家族の住む東京世田谷の代田に帰ったのは昭和二十二年十一月であった。茂吉は初めて会った初孫の茂一を連れて散歩したり遊んだりしており、二首目はそのことを詠んだものと思われる。

新しき言葉のひびき聞こえる開けし幸を時におも

はん

『黄月』昭和五十八年

さりとてもこれにてよしといふ事の無き奥行に常に

こごはる

同

一首目の歌には、「歌は誰に即くかによつて奥行に相

異あり。余は斎藤茂吉先生に学び得し幸ひを時につけて思ふ」と左註がある。この歌の晴れ晴れとした感じは、この年、勲四等旭日小綬章の叙勲を受けたことや日本芸術院会員に推挙されたことからくるかと思われる。左註の前半は茂吉に師事することのできた幸運を言っているように読めるが、また、歌誌「歩道」創刊時からの会員ら数人をはじめ会員の何人かが「歩道」を去ったことへの思いを述べたものかとも思われる。二首目は一首目の左註で述べた「奥行」にこだわって詠んだものである。心身ともに衰えていた晩年の佐太郎は昭和六十年の二月に茂吉の追悼会に出席したが、そのときのことをついに詠むことなく帰らぬ人となった。

佐太郎が茂吉を詠んだ歌は、山口茂吉、結城哀草果等に比べて極めて少ない。佐太郎は茂吉との縁を記録として短歌に詠むことを意識して避けたように思われる。詩としての短歌を追い求めた佐太郎は、記録としての茂吉との縁は『斎藤茂吉研究』『斎藤茂吉言行』等の形で表す方法をとったと言っているだろう。

楽しい時間 7

山本紀久雄

2013年4月30日

4月も「辻照子先生の料理とマナー」教室を欠席した。二カ月続けて欠席するとさびしい。ということでも料理の話ができないので、今月は村上春樹の新作について少し述べたい。

村上春樹の新作長編小説「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」の発行部数が4月18日で100万部に達したという。12日発売であるから一週間も経たない。すごい売れ行きである。発売当日夕方、渋谷で最初の書店に行くと「売れ切れです」。次にヒカリエ斜め向かいの大型書店に入ると、まだ少し残っていたのでホッと買って買う。

早速、読んでみる。いつものように村上作品は読み手を惹き込む。だが、一気に読むと「棒読み」になるので途中でやめ、敢えてジックリ「辿り読み」してみた。

村上作品は「面白い」「エンターテインメント性」「わくわく感」という分野の小説ではない。読み手によつては「難しい」「心理描写が長すぎる」「ストーリー時間軸が行ったり来たりで分かりにくい」という評価を受けるかもしれない。だが、世界中から受け入れられていることはご承知のとおりで、どの国に行っても知られているし、各国語に翻訳されて書店に並んでいる。実際に村上ファンという人物に何人にも会っている。

その一人、イタリア・プーリア州フォッジャ県マンフレドニア市、南イタリアの地方都市で人口約6万人の町、ここで会った39歳のフィレンツェ大学出身で水中生

物の繁殖技術コンサルタント、彼が語る村上春樹論は面白かった。2010年のことである。

殆ど掃除をしていない、汚すぎるマツダ車を運転しながら、村上小説は、ノルウェーの森を友人からもらって読んでハマったのだと語りだす。料理の場面が多いのも関心があった。イタリア語で「素晴らしき国の終わり」というのが大好きで「カフカの海辺」も読んだ。

一般に西洋の作家は売るために書いて、どこの国でも起きていることではなく、日本のことを書いているので外国人にとつて学ぶことが多いという。彼のこの評価は、他国で聞く村上作品の評価と異なる。他国では村上小説が、場面は日本で、日本人だけが登場するのに、外国に住む自分の身近なところを描き、自分のことを書いているのではないかと思ひ、その点から村上作品を受け入れている、というのが多い。だが、彼は視点を違えてはいるが、村上を高く評価している。

ところで、イタリアでは四種類のノルウェーの森が出版されていてそれぞれ中身が異なるという。日本語から英語に訳し、それからイタリア語に翻訳する場合と、日本語から直接イタリア語に訳した場合でニュアンスが異なるのと、訳者が違うと本の中身が異なるという意味である。日本でも同様な事があるのだろうかと思うが、マンフレドニア市の彼の話は強く記憶に残っている。

ところで、日本人で司馬遼太郎を知らない人はいなく、殆どの人たちは司馬の本を一冊は読んでいるだろうし、司馬が語る日本歴史観に納得している人も多い。

だが、日本でこれほど有名な司馬も、外国では全く無名である。知人で仏ジャーナリストのリオネル・クロゾン氏、彼と昨年夏、播磨灘を旅して、兵庫県赤穂市坂

越にある大避神社を訪れ「ここは司馬遼太郎が書いた『兜率天(そとつてん)の巡礼』の舞台の神社だ」と伝えると、司馬とは何者か、という疑問を呈された。ということは司馬を仏ジャーナリストは知らないのだ。さらに、今年3月、和紙の本を書くために来日し、各地を案内した米作家マーク・カーランスキー氏、米国では知られた作家であり、ニューヨーク・タイムズ寄稿記者であるが、マーク氏も司馬については知らないという。

司馬が世界で知られていない理由を分析すればいくつも挙げられるだろうが、一番の背景は日本歴史上の人物をテーマにしていることだろう。日本では最も著名な坂本龍馬であっても、世界では無名であるから、いくら司馬が坂本龍馬をロマン的人物として描いても、それを翻訳しようとする外国人はいないから、司馬の著書は翻訳されない。

したがって、外国人は司馬のことを知らないのが当たり前であるが、村上本は世界中の言語に翻訳されているので、十分に知られているし、今やノーベル賞受賞の最有力候補者であるという背景を考えれば、村上の主張には「世界の普遍性」があることを意味する。

2009年5月発売の「Q&A」も大ベストセラーになった。「Q」は「現実」「月がひとつの世界と」「もうひとつの現実」「月が二つ並んでいる世界、この間を歩き来るといふ設定で物語が進んでいく。今回の「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」も、夢の中で、現実にはあり得ない物事が語られていくというストーリー展開であって「現実世界」と「もうひとつの現実」が交互しつ、次第に本当の自分を見つけ出していく物語になっている。

ところで、実際の村上春樹はどういう生活態度なのだ

ろうか。

「村上の生活は規則正しい。夜9時ごろに就寝し(彼は夢を見ることがない)、目覚まし時計なしに午前4時ごろ起きる。起床したらすぐに、マッシュントッシュに向かつて午前11時まで執筆する。一日の執筆量は400字詰め原稿用紙10枚ほど」(2005年1月ニューヨーク・タイムズ)というように、まことに規則正しい生活スタイルを、一日も休まずに続けているらしい。ということは、夢も見なく、オカルト的な体験もしていないのに、「現実世界」と「もうひとつの現実」が交互する世界を描けるということになる。

つまり、体験していないことを文章にでき、その結果として世界の人たちが持つ普遍性を表現できるのである。何故、それを村上はできるのだろうか?

その解答をいつか分析し追及しなければならぬと思っているが、その作業とは「分らないことを考える」ということになる。

実は、人は、「分らない」から考え、想像し、工夫をし、成長するのだと思うし、自分の「やっていること」の本質は何かということ、それを見つけようとするものではないかとも思う。それはきつと、「すぐ分かる」ような薄っぺらいものでなく、奥行のある世界へ自分の身を置くことであり、そうしていること、つまり、なかなか「分らない」ものに関わっていることを考えることが、面白く、楽しいのではないかと常々思って行動している。また、それが「生きる」ということだろうとも思っている。

村上春樹を読んでいると、少しばかり難しく哲学的な話になったが、来月こそは辻料理教室に出席し、いつもの「楽しい時間」を過ごしたいと思っている。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (II)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書

「歌よみに与ふる書」は明治三十一年二月十一日から三月四日まで、新聞「日本」に十回に分けられ連載された。世評では俳句革新が一段落したので、この時期に短歌に取り組んだのではと言われているが、子規の短歌に対する関心は、早くから相当深いものがあつたが、社内事情もあつてなかなか実現できなかったようである。同年三月十九日付の落合直文宛子規の書簡に、その辺の事情がうかがえる。

「尤も歌については前年来しばしば打て出でむとして出づる能はざるの事情有之(これあり) (先輩と衝突するが大原因(あいなりも)に相成申候)。それがため、歌といふものは人のも自分のも一切出さざる方針を相取申候。しかるに過日来歌論和歌続々あらはれ候につきては愚論拙歌をも並べたく、羯南氏に相願ひ候上にて拙歌等掲載の義を許され漸く数年来の宿志を遂げ申候」

ここに言う歌論和歌が続々あらわれたとは「日本」に同年一月八日掲出の海上胤平の「破摩小言」に、一月二十日掲出の鈴木忠孝の「難桂園一枝(けいえんいっしをんす)」、二月七日以来連載の短歌集「新自讃歌」等を差している。又広く国内に眼を展ずると、落合直文門下の与謝野鉄幹は明治二十七年に短歌論「亡国の音」を発表し、それを具現化した歌集「東西南北」を明治二十九年に、「天地玄黄」をその翌年に出版している。その質実剛健な作風は「ますらおぶり」と呼ばれ世に広まっていた。

この様な歌壇の動きの中で、『日本』の社長陸羯南も子規の要求を認めざるを得なくなつたのである。子規はようやく羯南の許しを得て自分の歌論を展開する場を得、更に翌三十二年には、子規が自ら選者として「日本」に短歌欄をもうけ、広く短歌の募集を行ない子規歌論の普及に取組むことができた。

「歌よみに与ふる書」で展開している子規の歌論は、一面にはその広い文学観によつて論を進め、一面には実作者としての細かい技巧論も展開している。次回よりその内容を具体的に見ることとする。

「歴代天皇御製歌」(十二)

貫名海屋資料館

『皇極天皇』 第三十五代 『女帝』 在位六四二年(四十九歳) — 六四五年(五十二歳)

皇極天皇は、舒明天皇の皇后にして、第三十八代天智天皇、第四十代、天武天皇の母君でもある。

舒明天皇が崩御され、皇位を即位し皇極天皇となられた御世、中大兄皇子(後の天智天皇)が藤原の鎌足と共に入鹿を伐ち、大化改新となった。

皇極天皇は、同母弟の孝徳天皇に皇位を譲るが、孝徳天皇が崩御去れ、再び即位し齊明天皇として、二代の皇位につかれた。

『齊明天皇』 第三十七代、在位六五五年(六十二歳) — 六六一年(六十八歳)

齊明天皇の御世は、蝦夷征討、大和民族の勢力を北方に及ぼし、大化革新後の困難な対外国政策にもあたられ、中大兄皇子、群臣を率いて新羅征討にあたられたが途中、御病気により崩御された。

飛鳥川漲みなぎらひつつ行く水の間も無くも思ほゆるかも

飛鳥川があふれるように流れてゆく、その水のようにたえまなく健王(孫)のことが思われてならない。

贈呈誌

柗 四月号 砂山信一

雪はつか残る国道真つ直ぐに伸びたる果てに能登富士そびゆ

秋楡 四月号 小池静子

柗 五月号 服部忠夫

街角のパン屋の匂いに刺激さる食欲中枢 生きており今

還暦となりたる息子とともに飲む時代ことなる二人は無口に

愛媛アララギ 五月号 宮田規子

群山 四月号 大山文穂

濡れているかと思ふ艶をもち貝母ひと群清らに芽ぐむ

人だかりありて近づく雪の辻百万遍の念仏に遇ふ

鹿児島アララギ 四月号 重盛ヒサ子

榎の木 四月号 滝朝江

薩摩焼の壺に活けたる菜の花に春の気の満つ独りの居間に

伏せ置きし鉢の穴よりおづおづと疑問符の如つる草が出づ

高知アララギ 四月号 稲毛延年

俳誌 かさね 四月号 松本周二

少しづつ少しづつ良くなるか三年目が来て草刈機もつ

海苔粗朶に戯るごとき波がしら

冬雷 四月号 白川道子

俳誌 かさね 五月号 古川千鶴

どっさりと祈願の絵馬を着せられて道真公の穏しきお顔

遠ざかる棹に背を向け残る鴨

冬雷 五月号 赤羽佳年

いつ知らず降りたる雪の嵩があり窓の蔽ひを開けて見れば

「鍼はりの如く」 其二 夏 目 勝 弘

(大正三年五月二十二日から六月四日)

「詞書」五月二十二日夜、こゝろに苦悩やみがたきこと起りて眠遂におだやかならず

○小夜ふけてあいろもわからず悶もどゆれば明日は疲れて復た眠るらむ

○やはらかきくゝり枕まくらの蕎麦そば殻がらも耳みみにはきしむ身じろぐたびに
(てる子の兄より手紙で、二人の交際を拒否された夜である。てる子は手紙をも禁止)

「詞書」手紙のはしには必ず癒えよと人のいひこすことのみしみとうれしけれど

○ひたすらに病癒えなとおもへども悲しきときは飯減りにけり
「詞書」病院の一室にこもりける程は心に悩むことおほくいできて自らもまなこ窪めるを覺ゆるまでに成りたれば、いまは只よそに紛らさむことを求むる外にせん術もなく、五月三十日といふに雨いたく降りてわびしかりけれどもおして帰郷す

○垂乳根ちりねの母が吊りたる青蚊帳あおかむすをすがしといねつたるみたれども
(古里、母のみが心を癒してくれる)

「詞書」三十一日、こよいもはやくねて

○なきかはず二つの蛙かきひとつ止みひとつまた止みぬ我も眠くなりぬ
(裂かれた思いを感じられてならない)

「詞書」六月一日、あたりのもの凡ていまさらに目にめづらしければ出でありく

○麥刈むぎればうね間まくに打ちならび菽あまは生なむたり皆かままりて
「詞書」二日、雨戸あくる音に目さむ

○おろそかに蚊帳を透してみえねどもしづく懶なまく外は雨なりき
「詞書」やがてしげくふりいづ

○つくづくと夏の緑は快き杉をみあげて雨の脚ながし
(長塚節の生家を訪ね杉の屋敷林の薄暗いなかで梢をしばらく見上げていた、病より彼女への思いが消しきれない節の姿を浮べていた。)

「詞書」泥のぬかり足駄の齒にわびしけれど心ゆくばかりながめせんとてまたいでありく

○車前草まへくさは畑はたけのこみちに槍立やぶて、雨ふる日は行きがてぬかも
「詞書」我が草苺を好むこと度を知らずともいひつべし、未だ甚だしく體力の衰へざりし程は一度に五合にのほらざれば胸の爽かなるを覺えず (以下略)

○たちねは笊ざるもていゆく草苺赤きをつむおもしろぎとて
(節の歌に父を詠んだのをまだ見ない)

○幾度か雨にもいで、苺いちごつむ母のおよびは爪紅つめこうをせり
「詞書」三日微雨、人にあふこといでたれば車に幌かけて出づ、鬼怒川をわたる。

○鬼怒川の土手の小草こくさに交りたる木賊とくさの上に雨晴れむとす
(自分も鬼怒川の土手を歩いて、石下駅に向つた、土手の両側よりカラシナがトンネルをなしていた。土賊はついに見つからなかつた。)

「詞書」暑きころなればいつとても瘦せゆくが常ながら、ことしはまして胸のあたり骨あらはなれど、単衣の袂かぜにふくらみてけふは身の衰へおほえず、かゝることいくばくもえつゝべきにあらざれど猶獨り心に快からずしもあらず

○単衣ひとえきてこゝろほがらになりけり夏は必ず我れ死なざらむ
(節の死は大正四年二月八日午前十時)

「氷魚」のことから (149) 岡本八千代

今は、牡丹の花の咲いている季ときである。
子規の歌に、

病みふせるわが枕辺に運びくる鉢の牡丹の花ゆれやまず

と、いうのがある。この牡丹は、伊藤左千夫が小さな白い結び文をつけて贈った花である。この頃は明治三十三年、四月も終わりの頃であつたらしい。病氣も悪化して高熱も出ていた頃らしい。子規は、夢うつつにもこの牡丹の花に美しい少女の面影を空想しつうとつうと眠つたりしていたのかも知れない。

なぜなら、私の読み了つた彼の小説「曼珠沙華」も主人公との出会いが、やはり一人の少女であつた。その描き方が、夢うつつの幻想の中の出来事のように物語られているのかと感じたから。……。

ここから「曼珠沙華」について書きたい。

曼珠沙華は、「マンジュシヤゲ」、「彼岸花」、「雷花」とも言い秋に咲く花。私は、子供の頃は、花の茎を幾つにも折つて、首飾りにしたりして遊んだ。手に液がつくと、非常に苦い。葉にもなるらしいが、毒葉にもなるらしい。ちよつと怖い植物みたいだ。それが題名なのだ。

この作品は子規亡き後の（明治39年10・1、第10巻第1号）虚子の「ホトトギス」に、載せられた。

この物語は、一から十一までに場面が変わりながら通し

である。主人公は玉枝という人、「玉枝」という名であるが、男の人である。

(一)・玉枝は、「野村治右衛門」という昔から(三百年前から)のこの名が通つている家柄の人。玉枝は、常に沈うつな顔をしてふさぎこんでいた。

(二)・ある日、裏門より家の外に出た玉枝。

・森の道を歩いてゆくと、そこには名高い化地蔵がある。その前にくると子供心に恐ろしく思つていた。今も氣味が悪い。が、その前に往つてみた。

・いつもは、この地蔵の首は前の方に転がつたままであるのが今日は首が胴に載せてある。が、眼・口・鼻が見えない。石ころかと近よつて見て、玉枝は覚えさず笑いだした。——首は横向いて著いている。思わぬところで地蔵に笑わされてからは独り歩いていても何か分らないが、無暗におかしくなる。

・この日玉枝の胸の中の鬱結ふさげがみな此時一時に笑ひとなつて蒸発してしまつたよう。

・いつのまにか、林を離れて、三の淵、四の淵に出た。——返ろうと彼方を見たら、十間ばかり離れて田の中に一塊の高まり、何とも知れぬ大木一株もとはが雲(原)にそびえていた。——その下に、今を盛りと曼珠沙華が透間もなく生えていた。それが西日に赤毛氈あかたんを敷きつめたような。——

・その中に坐つて何やらしている一人の小娘を見つけたのだつた。(つづく)

ことのはスケッチ (41) 今泉 由利

『円空』

子供の頃だった。「円空仏」に出会ったのは…。「同じ気持ちになれているような」そんな幼ない感動だったけれど。

「長かった外国住いの潜在にも、「円空仏」は私の心の中にいてくださった。」

日本に帰り、日本人として生れた締めくくりに、自分なりの仏像を造ろう…とこのごろ思う。

仏像彫刻を勉強していた友人藤崎徹氏が、仏師としてクラスをもつほどに成長された。彼に教えていただくことにする。

円空（一六三三年～一六九五年）江戸時代前期、今から三百年ほど前。六十四年間の生涯に、十二万体の仏像を彫られ、千六百首の和歌を詠まれた。墨の線の大般若経の添絵も残る。

美濃の国に生れ、早くから仏門に入られ修業と全国を行脚され、訪れた土地の山林の木を素材に、木の生命力、神仏宿る木材から鈍とのみにより仏を彫り出す。

簡略された造形に、木の素材の魅力が引き出さる。木が風化され…虫喰いになり…

干ばつに苦しむ人には竜王像を。命を救うためには阿弥陀

像を。災害に苦しむ人には不動明王像。病に苦しむ人には薬師像と。悩み苦しむ人には不動明王像を…。

十二万體目の仏像「観喜天」を彫り終えられ、弥勒寺境内の長良川の畔で、即身仏となられた。

古今和歌集、空海の漢詩を手本に詠まれた円空の和歌を抜粋。

○皆人は 仏に成を 願ひつつ まことになれる けさの杉の木

○祭るらん 産の御神も 年越へて 今日こそ笑へ 小児

子（ちごのね）の春

○老ぬれば 残れる春の 花なるか 世に莊嚴（けだかけ）

き 遊ぶ文章（たまづさ）

○伊吹山 法ノ泉の 湧出る 水汲玉ノ神 かとぞ思う

○大峯や 天川に 年をへて 又くる春に 花やみるらん

○昨日今日 小篠山に 降雪は 年の終の 神の形かも

○こけむしる 笙の窟に しきのへて 長夜のころ 法の

ともしひ

○作りおく 神の御形の 円まどかなる 浮世を照す かがみ成

けり

○尊形（かり）うつす 花賀とそ念ふ 歡喜（よろこび）の

法の泉も 湧きて出（いづ）らん

○立ち上る 天の御空の 神なるか 高賀の山の 王かと

そ念

編集室だより【二〇一三年 四月】

○欧州合同原子核研究所（CERN）研究チームは、『暗黒物質によって起きたと考えて矛盾のない現象を観測した』との発表があった。

○蒲田「ア・ペア、胡蝶の間」において、たつみ歌謡教室の春期発表会に招かれた。

○「日比谷画廊」にて、ボーグ講師、藤崎陽子氏のリボンを使った服飾展へ。

○狭山丘陵の屋根歩き。様々な萌黄色に出会った。

○東京ミッドタウン「ビルボード・ライブ」。

ニュー YORK よりのスチュワートと七人のジャズ。清らかに美しかった。

○日本橋「たいめいけん」と「凧の博物館」。

○根岸病院ニュース「ねぎし」2013番号、拝受。

○三河アララギ、六〇周年記歌会。先達所縁の「御津山・吞龍」に於き。続けゆくことを誓う。

○東京都北区滝野川体育館。日本卓球連盟の先生の指導により卓球の練習。

○「山岡鉄舟研究会」。矢澤昌敏氏による「鉄舟、海舟所縁のお江戸史跡巡り」。伊藤左千夫牧舎兼旧居跡↓国産マツチ創設の新燧社↓勝海舟旧居跡↓山岡鉄舟居跡↓新徴組屋敷跡↓栗本鋤雲居跡↓三遊亭園朝旧居跡↓葛飾北斎生誕の地↓野見宿禰↓津軽家上屋敷跡↓江川太郎左衛門屋敷跡↓岡内重俊旧居跡↓吉良邸跡↓回向院↓与兵衛鯨発祥の地↓旧両国橋↓百本杭の跡↓御蔵橋跡↓舟橋聖一（生誕の地）↓本所↓御米蔵跡。

○香港出張三日間。

○ケア・ハウス長原エーゼット、短歌クラスへ。

○明治座創業（四〇周年記念。早乙女太二「神州伝馬侠」観劇。

○アルゼンチン・ブエノスアイレスより関口操氏来日

○小金井体育館に於て、時習館卓球部四月の練習会。

和菓子街道 (80)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(3)

日永の追分を出ると、しばらくはひたすら交通量の多い県道沿いを南下していく。東の空を仰ぐと、四日市らしく、工場から白い煙がたなびくのが見える。これが今の伊勢街道の景色かと思うと少し悲しいが、やがて田園風景やいかにも古そうな町並みに出会って、いくらか安堵した。

鈴鹿川を渡り、幾度か緩やかにカーブを描く道を行くと、伊勢街道の最初の宿場・神戸宿の入口を示す見附跡の石垣が見えてくる。石垣をよく観察してみると、木戸を支えていた溝の跡も残っていることが分る。

かつては旅籠がひしめき合っていた宿場町の中心街で、老舗和菓子屋を発見。江戸末期から明治初期の創業と伝えられる丸川菓子舗だ。城下町の名残か、神戸には菓子屋が多い。その中でも丸川は、上



城下町に相応しい上品な上生菓子。

生菓子や薯蕷饅頭など格の高い菓子を作る店だ。

いくつか季節の上生菓子を選んで、今は公園となっている神戸城跡へ。石垣のみとなった天守閣の上で、城下町の味を楽しんだ。

◆丸川菓子舗

住所：三重県鈴鹿市神戸2-10-50

電話：0593-82-0037

お知らせ

▽七月号の原稿は、六月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△四月十八日(木)「三河アラギ六十周年記念歌会」を三河の海を一望する「呑龍」に於て開催いたしました。

懐かしいお顔、新規入会の方々、大勢の参加を得て、賑やかな会となりました。短歌を友とするものどおし、すぐ打ち解けてお互いに詠草を論じ、問い、活発に意見交換がなされました。三人の先生方の適切な指導、講評があり、会員夫々の知識、うたいぶり等を、我がものとして歌への思いを、更に深めた有意義にそして楽しい三時間でした。

御協力ほんとうに有難うございました。

(小野)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半々年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半々年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年五月二十五日印刷 第六十巻 第六号
平成二十五年六月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利
三河アラギ会
〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yuri188@cronos.oon.ne.jp

URL
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所
株式会社 核創美